

おける大豆作の連作は病害虫・その他に依る稔実不良のため非常な生産減となっている。

4. 第四作目：開墾2年目において新墾とは多少相違するかも知れないが稔実不良所謂不稔穂が大発生し、第二作目の結果とは相違したため成績を攪乱した(第1表)。このような発生の仕方はいかなる病害虫害的なものを感じさせるがその証拠は発見出来なかった。

両土壌とも不稔穂の発生は全面的に見られ、特に昨年度にほとんど発生しなかった新墾地が非常に多くの発生を見たのは意外であり、既耕地は減少し収量も増した傾向にあった。また各処理間の傾向は明確ではないが、新墾地の標準区・深耕磷酸増施肥区が最も稔実良く、子実重量が重い。そしてそれは不稔穂発生率も少い。なお大

麦の分析結果を示すと第2表の通りである。

4. 考 察

以上の成績から見い出されることは、1年目の結果からは稔実不良に依る不稔穂の発生は、土壌の相違に依るものと考えられる。更に2年目からは病害虫が大きく、それに何等かの因子が関係したものと見られる。

穂数及び分析結果から、作物自体の養分の吸収あるいは養分の蓄積移行に関係しているとも考えられる。また気象に依る不稔現象も考えられるが、しかし以上の因子は単独でなく2～3の原因が相関連して発生するものと考えられる。

大豆「ゲデンシラズ1号」について

高 橋 信・畠 山 俊 朗

(秋 田 県 農 試)

秋田県畑作の大宗である大豆は、水稻作との競合で大部分は大豆単作の連作で粗放栽培されている。したがって畑地は瘠薄となり、特に病害虫が漸増し、最近問題となっている線虫はほとんど全県的に発生を見ている。このような不良条件の現地に導入して、よい成績を得る「ゲデンシラズ1号」の特性を報告する。

1. 来 歴

秋田県仙北郡千畑村地方に明治年代から栽培されてきた「下田不知」と称する在来種があってその来歴は明らかでない。昭和23年畑屋村の高橋克己氏から種子の分譲を受け、実際栽培に支障がない純度にした種子を昭和24年から供試して、更に昭和27年から選抜目標を早生で蔓化性低く、耐虫性(線虫)強く、良質・多収系統の選抜において純系分離を行った。

すなわち第1年目は最も変異に富む個体を60コ体選抜、第2年目は11系統を選抜し線虫畑における系統間の生育および着莢調査をした。

第3年目選抜系統群数5、系統数75、株数225で在来種「下田不知」より3日早熟、直立型で蔓化性少なく、線虫畑における生産力も変りなく、栽培の安全性に富む系統群を選抜した。これが「ゲデンシラズ1号」で粒揃いはよいが少々小粒となる嫌いがある。

2. 形 態 的 特 徴

第1図写真にみられるようにIIIc型で分枝が多く(第1表)、特に第2次分枝が多く、長く且つ細く弱い。花色と胚軸色は紫で粒は大きい方で第2図写真にみられるようにやや扁円、乳白色で臍色は種皮色と同様で、品質は極めてよく、豆腐屋は「ゴ」があると評判がよい。

3. 生 態 的 特 性

第1表にみられるように草の伸びは極めて旺盛である。成熟期は「陸羽27号」より10～15日おそく、在来種「鬼赤莢」程度で10月下旬である。第6図にみられるように大豆線虫畑における生育及び着莢は良好で耐虫性が強い。

この線虫畑における品種の生産力については第9回東北農業研究会で発表したもので詳細は省略する。

第5図に示すとおり、晩播成績がよいことから晩播・晩収に適し、稲作労力との競合が避けられ、畑地の高度利用ができる。

蔓化性が高く、分枝が弱く、多肥多収穫栽培には向かないが、逆に瘠地に適する。

すなわち第3図及び第4図でみられるように「陸羽27号」や「奥羽13号」より P_2O_5 および K_2O 増施による収

第1表 ゲデンシラズ1号の現地における生育 昭29.30年8月21~23日調べ

場 所	項目 試験 区別	土 地 状 態	茎 長 cm	分枝数 本	開花期 月日	有望度 ○有望 △やや △有望	陸羽27号との比または差				
							茎 長 %			分 枝 数 %	
花 輪	普 通	腐植に富む 壤土開拓地	66.2	6.3	8.18	△晩熟	110120130	110120130140		1	
畑 屋	標肥普植	礫を含む壤土	58.4	3.4	.26	○		575		9	
	半肥密植	連作線虫発生地	62.6	3.0	.26	○		750		12	
	多肥疎播	線虫軽度の 調査	68.2	6.4	.26	○		206		12	
生保内	普 通	壤土開拓地 標高300m	59.1	4.2	.22	△晩熟				6	
横 手	標 播	沖 積 地	84.0	11.7	.21	△蔓化				9	
	晩 播	埴 壤 土	61.2	8.8	.21	○				4	
山 内	標 播	洪 積 台 地	61.0	6.5	.21	△倒伏				7	
	晩 播	埴 壤 土	49.7	6.2	.22	○				3	
上 浜	晩 播	火山泥流埴土	55.8	3.7	.20	○		218		3	

量増加率が低く、 P_2O_5 および K_2O 施肥の少ない栽培では「陸羽27号」「奥羽13号」より多収である。

なお大豆黒痘病に対しては花岡町における常習地で検定の結果「ウゴダイズ」「鬼赤莢」よりも罹病が少ない。また最近問題になっているビールの発生も少ないように観察されている。

4. 栽培上の注意

極晩生であるから降雪の早い高冷地の開拓地等では栽培は無理であるが、秋田県では標高300mの開拓地での

栽培は不可能ではない。

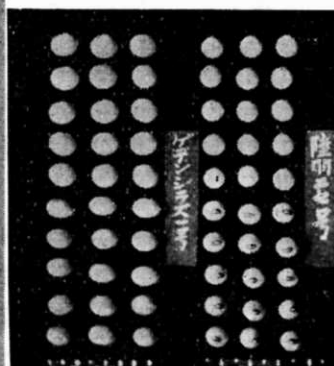
また多肥密植や、適期播（5月中～下旬）で普通「陸羽27号」や「奥羽13号」の栽植密度では蔓化する危険があるから倍以上の疎植とすることが望ましい。

大豆「ゲデンシラズ1号」は要するに大豆線虫畑や少肥や、晩播・晩収・連作栽培の多い水田作偏重経営地帯の畑地で好結果をもたらすようである。

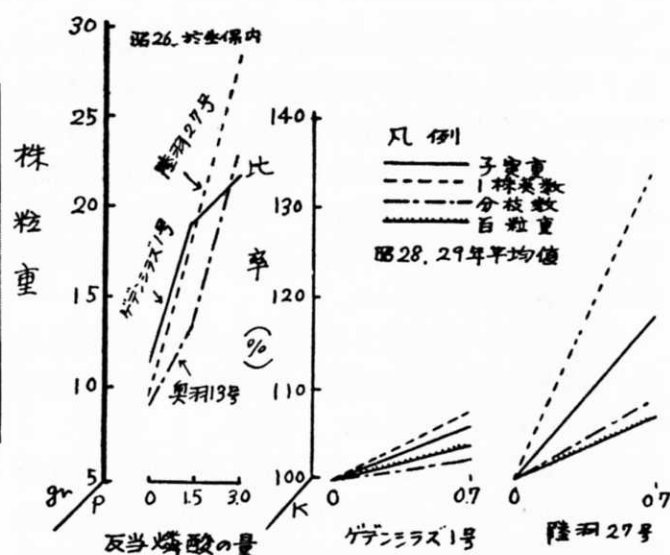
大豆品種の耐虫性（線虫）・耐蔓化性・早熟性は今後の品種育成上の重要課題である。

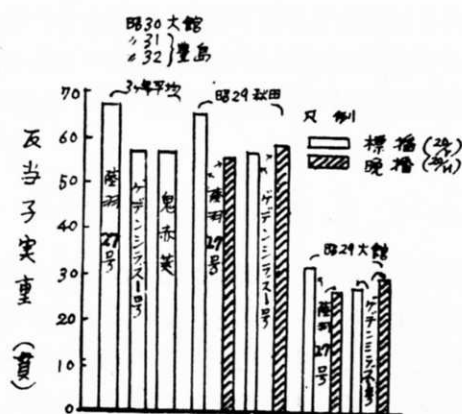


第1図 形 態

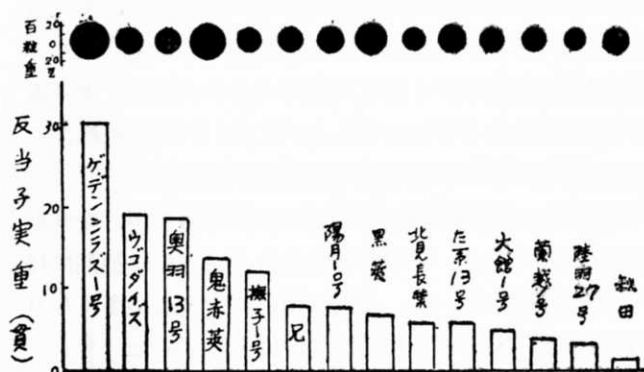


第2図 粒 形

第3図 磷酸施用量と
1株粒重第4図 加里施用と
増加率



第5図 ゲデンシラズ1号の収量



第6図 大豆線虫畑における品種の生産力

小麦の生育差異が間作大豆の生育相に及ぼす影響

大 泉 久 一・御子柴 晴 夫

(東北農試)

筆者等は間作大豆の生育相を単作大豆と比べて検討して来たが1957年は小麦の品種及び播巾を変えて、麦間期間中における大豆の受光量と生育相との関係を検討したので報告する。

1. 材料並びに方法

試験区はコケシ小麦・ナンブ小麦・ヒツミ小麦の3品種を各播巾4寸及び8寸の計6区を設け、畦巾は2尺3寸としてその間に大豆農林4号を6寸間隔に1本立として均一に栽培した。畦間の受光量は照度計で測定した。

2. 実験結果並びに考察

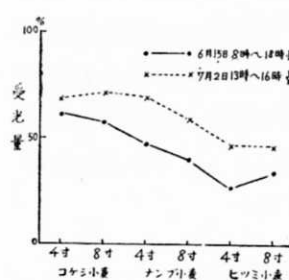
1. 麦の生育と間作大豆の受光量との関係

麦の草丈・止葉高・止葉層の巾・穂長・稈太・稈重はコケシ小麦4寸・8寸、ナンブ小麦4寸・8寸、ヒツミ小麦4寸・8寸の順に次第に大きくなり、間作大豆の受光量は前記の順に小さくなった。したがって麦のそれらの形質と受光量との間には強い負の相関が認められた。

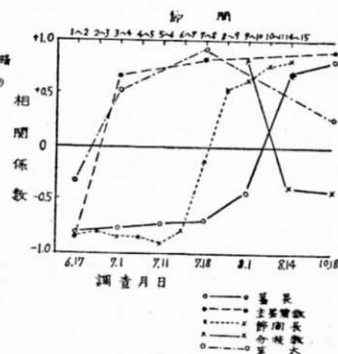
2. 受光量と大豆の生育との関係

茎長は麦間期間中すなわち7月18日まで受光量との間に強い負の相関がみられ、受光量が少い程大豆はより徒長の様相を示すが、麦刈取後この関係が薄れて伸長期の

後期には逆に正の相関が認められる。したがって間作期間中の受光量が少い程、よりその後の伸長は抑えられることを示している。



第1図 間作大豆の受光量(裸地100)



第2図 大豆の生育と受光量との相関の推移

節間長も同様に麦間期間中に生育を終った6〜7節間までは強い負の相関を示すが、麦刈取時生育しつつあった7〜8節間は相関が薄れ、その後伸長した8〜9以後の節間は正の相関を示している。

主茎葉数は生育初期から次第に正の相関が高くなり麦刈取後は更につよい正の相関がみられた。なお6月17日の負の相関は麦間期間畦間の温度・湿度等が高いことその他によって、発芽時の生育は麦の出来のよい方が優るためであろうと思われる。